



# 元気っ子

No 317 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

新年あけましておめでとうございます。2024 年も全力投球で頑張りますのでよろしくお願い致します。

子どもとの関わりには様々な大切はエッセンスがありますが、これからの保育・子育てにおいて、絶対に外せないものを一つ挙げるとしたら「主体性を奪わない関わり（自律心を育む）」と答えます。子どもは元々、好奇心旺盛な赤ちゃんとして生まれてきます。しかし成長の過程において、徐々にその「主体性」を奪われていってしまっていることが、近年非常に大きな問題として扱われることが増えてきました。

例えば、「一斉活動」の場合、その活動をやりたいと思っていない子、もしくは何かやりたいことが定まっていな子に対して、何となく過ごしていたら先生が活動を用意してくれたという日々を過ごしたケースを考えると、自ら意欲的にやりたいことに取り組む姿勢が失われ、活動は大人が用意してくれるものという意識になっていきます。そしてその活動が楽しくなかった時、それを大人のせいにするようになります。

またお散歩などに出掛ける際も、目的地も分からないまま、何となく列についていったら目的地に着いたというケースも同じです。

要は背景に、保育士や保護者などの大人が子どもに対して手をかけ過ぎ、あれこれと指示を出してしまう現状があります。サービス過剰な環境に慣れ、ずっと受動的に育ってきた子どもは、自分で考えて行動する力が育まれません。「指示されて当たり前」の状況で、「誰かの言う通りにやった」のに良い結果が出ない。そんな体験を通して、うまくいかないときに人のせいにするようになっていくのだと思います。学校教育でいえば、テストで良い成績が取れなかったときに「先生の教え方が悪い」「学校教育が不十分だから良い塾に通わなければならない」といった思考になってしまう状態と同じです。

また「自律する子の育て方」(SB 新書)の中で、脳神経科学者の青砥瑞人さんは、自己決定が許される環境で自己決定の経験を繰り返していけば、人の脳はその動きに慣れていき、逆に、自己決定に慣れていない人間は自己決定しようとせず、自己決定したくないから、「決めて下さい」と人や組織に文句ばかり言うようになります。あらたな制度や仕組みに対して「自分に合っていない」と文句だけ言うような状況になることを脳の構造から裏付けています。

これから子どもたちは今の時代よりもさらに不確実性の高い未来を生きていかななくてはなりません。「自分自身で考え、判断し、行動する力」そして自分自身をコントロールし、人の力も借りながら、自分の意志で一步一步世の中を歩いていける力は、そうした世界を生きていくためには欠かせないものです。

保育所保育指針にもあるように、乳幼児期からのこういった自己決定を繰り返す経験、主体性を奪わない関わりというものは、子どもたちが大人になってからの生活に影響を及ぼすことが明らかになっていると言われています。ながさわ保育園においても子どもたちの主体性、自律心、自己決定の場を大切にしながら環境を常に意識して参ります。

